



石巻専修大学 学長

坂田 隆

発刊にあたり

3月11日に発生した東日本大震災によって石巻専修大学は6名の在学学生を失いました。すこやかに暮らし、社会で活躍しようと大学生活を愉しくすごしていた矢先に夢を断たれ、非業の死を遂げた諸君のことをどのように語ればよいのか、いまだに言葉をみつけれません。

いっぽうで、学内での死傷者はありませんでした。その後の対応をつうじて、石巻専修大学が災害対策拠点として優れていることが明らかになりました。言い換えれば、大学を災害対策拠点として考え、整備することが新たな課題として出てきました。頑強な校舎、自家発電装置、屋上の水タンク、ペアガラスの窓といった施設・設備の面や、柔軟で迅速な決断ができる私立大学の組織、多面的な能力を持った教職員、優秀な施設管理会社、地元の自治体や住民の皆さんとの日頃からのおつき合いなどが幸いました。

これらの全てが他の大学に当てはまるわけではないでしょう。しかし、このたびの地震と津波のあと、石巻専修大学でどのようなことがおこっていたのかを具体的に整理して公開することで、大学を災害対策拠点として整備する際の参考にしていただき、新しい考えを紡ぎ出す刺激にいただければ幸いです。

ともすれば大学人は研究対象を観察する側にまわることが多いのですが、この冊子は観察される側にまわった大学人の記録です。まだ水道も復旧しなかった時期に行った学部長会で「私たちはモルモットになろう」という提案をしました。私たち石巻専修大学の教職員が観察対象になることを自覚し、記録を残そうという提案です。

このときに、被災地の防災と復興のための事業をおこなうことも決まりました。のちに「復興共生プロジェクト」という名前でよばれるようになった事業です。この「復興共生プロジェクト」のなかの事業として、今回の震災のあとの石巻専修大学の動きをアーカイブとして残すということが提案され、紀要編集委員会がこの冊子を刊行することにいたしました。

したがって、この特別号は体系的な研究論文を掲載するというよりは、ひとまず一次データを整理して、皆様の研究や今後の対策の材料として使っていただくことを念頭に置いています。ですから、体裁の統一や表現の吟味よりも、「何が起こっていたか」をなるべく直截にお伝えすることに重点を置きました。そのため、大学としての見解になじまない内容や、激しい表現もありますが御諒承のほどを御願い申し上げます。私たち石巻専修大学の教職員は、こうした私たちの体験が様々な皆様によって活かされ、今後の防災と災害対応に資することを心から願っています。

最後になりましたが、これまで国内外の皆様からお寄せ頂きましたお見舞いやご支援に深甚の謝意を表しますとともに、今後のお力添えをお願い申し上げます。



学校法人専修大学 理事長

日高 義博

復興への「絆」を絶やさず

平成23年3月11日に発生したマグニチュード9.0という巨大地震は、広範囲に及ぶ未曾有の大被害をもたらし、東日本大震災と呼ばれるに至りました。激震地にありました石巻専修大学においては、学生7名（入学予定者1名を含む）が亡くなり、多くの学生・教職員が被災するという状況の下で、その痛みを耐えながら、石巻圏域の救援活動に全力を尽くし、オール専修の力を結集して地域社会の復興に向けた活動を現在も続けています。

石巻キャンパスの建物は、頑強に建てられていたことからほぼ無傷の状態にあり、地震発生直後から、石巻地域の救援基地としての機能を果たすことが出来ました。学生・教職員の安否確認の作業を進めながら、3月の卒業式の挙行を断念し、新学期も5月下旬まで開始できませんでした。一方、キャンパスにあっては、避難所、診察室、ボランティアセンターなど支援活動の場として、重要な役割を担いました。地震後の処置は、いずれも異例づくめの対応でありましたが、「地域に根ざす大学」を目指してきた石巻専修大学としては、緊急時に果たすべき大学の役割の重さを実感しつつ、社会貢献の実践を推進してきた次第です。

震災により多大の被害を被った石巻地域にあっては、地域社会の立て直しにはなお様々な支援が必要です。石巻専修大学は今後も教育・研究機関として地域社会に貢献していく所存であります。今般、『東日本大震災 石巻専修大学報告書』（石巻専修大学紀要編集委員会）を刊行することに致しました。本報告書は、地震発生後、石巻専修大学ではどのような対応・処置を行い、かつどのような社会貢献を実践してきたかを、様々な資料や証言をもとに振り返るとともに、今後の課題を記録に残すことを企図したものです。激震地において本学がどのような社会貢献を果たしてきたかを省察したものであります。本報告書を契機に、大学と地域社会との連携が深まり、復興への「絆」が強化されることを期待してやみません。



石巻市長

亀山 紘

さらなる連携を祈念して

本刊が東日本大震災における最大被災地・石巻に立地する石巻専修大学だからこそその貴重な資料として編纂されておりますことにつきまして、発刊に携わられた大学御関係者の皆様の御尽力、御努力に深く敬意を表します。

平成23年3月11日、東日本大震災が発生しました。日本観測史上最大規模マグニチュード9.0、最大震度7の地震、それに続く大津波が東日本を襲いました。岩手、宮城、福島沿岸部では、特に津波による被害が甚大で、多くの人々が尊い命を奪われ、築き上げてきた資産、文化、生活の営みを瞬時に失いました。

このような中、石巻専修大学においては、発災当初から、避難所・救護所の設営やボランティアのために学内施設を開放していただくなど、深い絶望と底知れぬ悲しみに襲われた被災者の命を支えてくださいました。

今、全国から心温まる御支援をいただきながら、復旧・復興に向け、本格的に取り組んでおりますが、最大の被災都市・石巻を希望に満ちた復興モデル都市・石巻へと再生させるために、地域で生きる大学・地域を生かす大学として、石巻の発展とともに歩む石巻専修大学には、引き続き御協力、御支援を賜りたく存じます。

最後になりますが、本報告書が貴重な資料として後世に伝えられ、今後への震災の教訓、地域社会と大学の連携などに生かされますことを祈念申し上げます。



宮城県知事

村井 嘉浩

貴重な資料となることを願って

はじめに、今回の未曾有の大震災により尊い命を失われた方々のご冥福をお祈りするとともに、被災された方々には心よりお見舞い申し上げます。

さて、平成23年3月11日午後2時46分頃、三陸沖を震源とする、我が国の地震観測史上最大となるマグニチュード9.0の大地震が発生しました。そしてこの地震に伴い、岩手県境から福島県境の沿岸部全域が大津波により甚大な被害を被りました。

宮城県では、近い将来、高い確率で発生するとされていた宮城県沖地震などの被害想定調査を実施し、地震・津波に備えてきましたが、東日本大震災はそれを遙かに超えるものでした。今回の震災では、千年に一度ともいわれるような巨大地震に対する備えが必要であるということが、最大の教訓ではないかと考えております。

今回の震災は被害が極めて広域に及んだことから、ボランティアの支援活動が非常に重要となりました。全国各地から駆けつけていただいた多くのボランティアの方々をどのように受け入れるかが、有効な活動を行っていただく鍵となっていました。

県内で最も大きな被害を受けた石巻市では、NPO、NGOなどの団体ボランティアをまとめる「災害復興支援協議会」、そして個人ボランティアをまとめる「災害ボランティアセンター」を迅速に立ち上げ、災害対策本部や自衛隊と連携し、被災者のニーズに合った支援を重複なく、効率よく行っていました。そして、キャンパスへのボランティア受け入れをいち早く決断していただき、その拠点となったのが、石巻専修大学であり、改めて心より感謝申し上げます。

本報告書においては、教育研究機関として東日本大震災に関わった記録と諸課題が浮き彫りにされております。今後、本県震災復興対策の推進に大いに寄与するとともに、県内外の広域災害対策の貴重な資料となることを願ってやみません。



石巻赤十字病院 病院長
石巻赤十字看護専門学校長

飯沼 一宇

お礼の言葉にかえて

平成23年3月11日の東日本大震災は私たちにとって忘れられない傷跡と記憶を残しました。石巻沿岸部が壊滅的打撃を受けたなかで、石巻専修大学は北上川の近くにもかかわらず被害が最小でした。石巻赤十字病院も幸いにして被害が少なく済みしました。これには地形、建築構造など様々な要因があると思います。これらを検証、分析し、いかにすれば災害に負けないかを継承していく必要があるでしょう。私どもも生き残りをえた要因を分析し、今後に生かしたいと思っています。

石巻赤十字病院が併設しています湊地区にあった石巻赤十字看護専門学校が津波のために使用不能になりましたが、石巻専修大学のご好意により、校舎の一部をお借りして授業を再開することができました。幸いに今年度の入学者は辞退者がおらず、3学年全員の学び舎が確保されました。大変にありがたく感謝申し上げます。

石巻地域で活動に支障のなかった二つの公的な機関の存在は大きな意味を持つと思います。石巻専修大学、石巻赤十字看護専門学校そして石巻赤十字病院という教育・医療を担う施設が今後協力して、石巻地域の教育を守り、文化を醸成し、健康を増進することが私どもに課せられた責務と思っています。石巻の復興に向けて共に歩んで行くことが地域の期待に応えることになるでしょう。今後ともよろしくお願い申し上げます。